

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520670

研究課題名(和文) タイ語における五感の表現とタイ人の感覚

研究課題名(英文) sensation words in the thai language:metaphoric transfers and people's consciousness

研究代表者

宮本 マラシー (MIYAMOTO, Marasri)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：00200212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：五感を表すタイ語表現には比喩的転用が多く見られる。ある感覚を表すために他の感覚語から転用する「共感覚的比喩」もあれば、感覚以外のことを表すための転用もある。「共感覚的比喩」の方向には、視覚 味覚、視覚 嗅覚、視覚 聴覚、触覚 視覚、触覚 味覚、触覚 聴覚、味覚 嗅覚、味覚 聴覚、があり、必ずしも先行研究の指摘にあるような一方向の転用ばかりではない。人や出来事の状態、人の感情、思考等、感覚以外のことを表すように転用されるものの方が「共感覚的比喩」よりも多くある。そして、それら比喩的転用を通して、タイ人の価値観や意識について確認することが出来た。

研究成果の概要(英文)：The results of this study indicate that in the Thai language there occur many cases of the metaphoric transfer of sensation words. For “synaesthetic metaphors” (metaphoric transfer present between words describing different sensations), that have been found to occur between <sight taste>, <sight olfactory>, <sight auditory>, <touch sight>, <touch taste>, <touch auditory>, <taste olfactory>, <taste auditory>, the directions of transfers are not always one-way, as supported by previous research. In addition, it has been found that many sensation words have been developed to describe the states of people or things, people’s thoughts, feelings and emotions etc., and these metaphoric transfers have in fact been found to be more numerous than the occurrences of “synaesthetic metaphors”. It is through the studying and understanding of these metaphorically transferred meanings that inferences can be made about Thai people’s values and consciousness.

研究分野：社会言語学

キーワード：タイ語表現 五感の言葉 視覚語 味覚語 触覚語 嗅覚後 聴覚語 比喩

1. **研究開始当初の背景**

タイでは曜日の色が決まっているので、人々は生まれた曜日の色を自身のラッキーカラーとしたり、服装に取り入れたりするなど、昔から日常生活における色使いに単なる好み以外の思いが感じられることがある。2006年から2008年にかけて、国全体が黄色で染まったかのように、タイのどこへ行っても黄色の服を着用する人たちがいた。2007年に満80歳の誕生日を迎えられた、現国王がお生まれになった月曜日の色が黄色だったため、その祝意を表するため多くの人々が黄色の服を着用したためである。また、同じ頃から、政治的な対立をしている組織の間で、国王支持派が黄色を組織のシンボルカラーとして使ったため、その対抗組織が赤色を使い始めた。それ以来、「赤」「黄」というと、人々は政治的な対立や組織のことを思い浮かべるようになった。また、「紫」は伝統的に、夫を失った女性のシンボルカラーであったが、最近では同性愛者の呼称詞として用いられようになってきた。これらの現象には、色に対する伝統的、習慣的なタイ人の意識とその変化が表されていると考えられる。色彩の言葉だけではなく、色彩以外の視覚、触覚、味覚、嗅覚、そして聴覚といった五感を表す言葉にもそのようにタイ人の認識と意識が何らかの形で表されていると考えられる。しかし、タイ語研究界では、五感を表す表現を取り上げ、言語的な側面のみならず文化的な側面をも検討する本格的な研究はまだ行われていないのが現状であった。

2. **研究の目的**

五感の基本語彙を収集し、その基本語とそれらの語から派生する熟語、慣用句を意味的に分析し、その比喩的な転用の特徴、およびそこに見られるタイ人のそれぞれの感覚に対する認識と意識を明らかにする。

3. **研究の方法**

辞典、インターネット、コーパス、インフォーマントへのインタビューから、日常生活で実際に用いられる語、句、そしてそれらの例文を収集し、意味的に分析し、比喩的転用における言語的特徴およびそこに見られるタイ人のものの考え方や意識を考察する。

4. **研究成果**

(1) **感覚語の語彙的特徴**：それぞれの感覚を表す基本語は、主に1音節の言葉である。その数は、嗅覚語と聴覚語よりも、視覚語、触覚語、そして味覚語に圧倒的に多い。また、基本語彙の中には、たと

えば、<イモ、豆、ゴマ、クリーム等の風味を表し、食べ始めたら止められないようなあとを引く味を表す「マン」>、<わさびのような鼻につんとくる、強烈で刺激性のある匂い「チュン」>、<音や声が弱くて小さい「ペーオ」>、のようなタイ独自の表現も見られる。そして、それぞれの基本語(主に、「色」「味」「匂い」「音(声)」に関する名詞)から派生する表現にもタイ語独特の感覚の表現が多く含まれている。たとえば、<「シー・ペーン(色・ペーン)」TPOに相応しくない派手な色>、<「味が互いに切り合う」混合されているそれぞれの味は強いが、調和がとれているので、満足感をもたらす>、など。

(2) **比喩的転用**

共感覚的比喩：五感を表す基本語で、一つの感覚を表す言葉で別の感覚を表す表現として比喩的転用をされることである。このような比喩は様々な言語に見られ、そしてその比喩の方向が一般的に一方方向的であることがWilliams[1976]によって指摘されている。その一方方向的とは、<触覚 視覚>、<触覚 聴覚>、<触覚 味覚>、<味覚 嗅覚>、<味覚 聴覚>はあるが、その逆の転用方向はないということである。タイ語にも、共感覚的比喩は多く見られる。Williams[1976]の指摘したように、<触覚 視覚>、<触覚 味覚>、<味覚 聴覚>があってもその逆の転用方向は見られない。しかし、<触覚 聴覚>、<味覚 嗅覚>においては、<聴覚 触覚>、<嗅覚 味覚>といった逆の方向も見られる。また、Williams[1976]の指摘には見られなかった<味覚 視覚>と<触覚 嗅覚>という転用も見られる。

<視覚 味覚>は混合されている味のまるやかさ、または味の強さを表す(e.g.「丸い味」=調和がとれていて美味しい、「尖って甘い」=甘みが際立っている)。**<視覚 嗅覚>**は匂いをより具体化する(e.g.「緑臭い」=青臭い匂いがしている)。**<視覚 聴覚>**は声の状態、およびある特定の感情によって発生される声を表す(e.g.「濁っている声」=不満を含んだ声、「大きい声」=低い声)。

<触覚 視覚>は主に色彩の濃淡や激しさを表す(e.g.「冷たい色」=寒色、「痛々しい色」=激しくて派手な色)。

<触覚 味覚>は味の濃厚さや刺激の度合いを表す(e.g.「軽い味」=優しい味、「沁みている味」=酸っぱくて、塩辛くて、唐辛子辛いといったように、混ざった、激しくて、おいしい味)。**<触覚 嗅覚>**は匂いの強弱を付けたり、匂

いをより具体化する (e.g. 「柔らかい匂い」 = 軽くて優しい匂い、「強い匂い」 = 激しい匂い)。<触覚 聴覚>は穏やかな、あるいは迫力のある印象を与える声を表す (e.g. 「柔らかい声」 = 聴き心地がよく優しい声、「重い声」 = 大きくて強い声)。

<味覚 視覚>は色彩の優しさや大胆さを表す (e.g. 「甘い色」 = 薄くて優しい色、「酸っぱい色」 = 派手な色)。<味覚 嗅覚>はそれぞれの匂いをより具体化する (e.g. 「甘くて香ばしい」 = 甘みを含んだ香ばしい匂いがする、「酸っぱくて臭い」 = 酸味を含んだ臭い匂いがしている)。<味覚 聴覚>は快適な感覚を引き起こす声を表す (e.g. 「甘い声」 = 聴き心地の良い声)。

<嗅覚 味覚>は味によりよい評価、または効果を与える (e.g. 「香ばしくて甘い」 = 香ばしさを含んだ甘み、「香ばしくて唐辛子辛い」 = 香ばしさを含んだ辛さ)。

そして、<聴覚 触覚>は優しさという心遣いや嗜みの深さといった内面的な感覚を伴う触覚を表す (e.g. 「軽くて優しく触る」 = 優しく触る)。

感覚分野を超えて感覚以外のことを表す比喩的転用：すべての感覚語において、同じ感覚分野内の比喩的転用よりも、感覚以外のことを表すように転用されることの方が多く見られる。それぞれの感覚語とその転義は下記の通りである。

a) 「視覚語」からの転用は、物の名称として用いられる (e.g. 「色があるテレビ」 = カラーテレビ、「長い馬」 = ベンチ) 以外に、人の身体的・精神的状態、行動、物・出来事の状態、への意味的拡張を持たせる。特に、人の身体的・精神的状態、行動については、人種、年齢、集団、性別、地域、社会的立場、思考、能力、性格、精神状態、倫理、道徳などにまつわる意味的拡張を持つようになった。人種、年齢、集団の違いは、主に色覚の形容詞の比喩的転用に見られる (e.g. 「赤い頭」 = 西洋人、「白い頭」 = お年寄り)。性別は、「位置づけの形容詞」の比喩的転用に見られる (e.g. 「象の前足」 = 男性、「象の後足」 = 女性)。思考や能力は、形体覚と運動覚の形容詞の比喩的転用に見られる (e.g. 「古い頭」 = 保守的、「心が広い」 = 寛大な、「目線が狭い」 = 視野が狭い、「頭が速い」 = 頭の回転が速い)。性格は、主に形体覚の比喩的転用に見られ (e.g. 「高く望む」 = 高望みをする、「低く望む」 = 下賤なことを好む) そして精神状態、倫理、道徳は、明暗覚、色覚、さらに形体覚の形容詞の比喩的転用に見られる (e.g. 「明るい目」 = 目が覚める、「心が黒い」 =

残忍な、残酷な)。

b) 「触覚語」は物の名称 (e.g. 「硬い水」 = 氷、「粘り気のある米」 = 餅米、餅) に用いられることもあれば、人の性格 (e.g. 「粘り気のある糞」 = ケチな、「心が熱い」 = 短気な、「心が冷たい」 = 気が長い)、言動の状態 (e.g. 「柔らかい言葉」 = 耳に心地よいしゃべり方、「硬い声」 = 相手を恐れず自信を持ってずばりと言つてのける声)、思考 (e.g. 「硬い頭」 = 頑固な、なかなか人の言うことを信じない、「外は柔らかいが内は硬い」 = 外柔内剛)、精神的な状態 (e.g. 「心が重い」 = 気が重い、心配する、「心が軽い」 = ほっとする、安心する) を表すようにも用いられる。

c) 「味覚語」は食物の名称として用いられることがある (e.g. 「甘い水」 = シロップ、「苦い貝」 = 淡水巻貝) また、人の外形 (e.g. 「味の無い顔」 = 肌が青白くて、目鼻などに目立つところがない、「目が甘い」 = 大きくて魅力がある目)、性格 (e.g. 「塩辛い人」 = 自分勝手にドケチな人、「口が甘い」 = よくお世辞を言う)、言動や状態の快適の度合い (e.g. 「甘い声」 = 耳に心地よく響く声、「辛い言葉」 = 激しい口論、激しい言葉遣い)、精神的な幸・不幸 (e.g. 「外甘内苦」 = 言葉や行動等、表面は良さそうに見えて、その実内心は悪い、「甘い結婚生活」 = 幸せな結婚生活) を表すようにも転用される。

d) 「嗅覚語」は物の名称 (e.g. 「香ばしい水」 = 香水、「臭い球」 = 衣類の防臭剤) だけではなく、人やものの状態、人の感情と心理状態を表すようにも転用される (e.g. 「香ばしい名前」 = 名前がよく知られている、「ツンとくる」 = 頭に来る、かっとなる、腹が立つ、「臭くて腐敗した顔をしている」 = うんざりして耐えられないような顔をしている、不満な態度を表している)。

e) 「聴覚語」は物の名称に転用されることはみられないが、人や出来事の状態を表すように転用されることがある (e.g. 「(音や声が) 大きい」 = 有名である、よく知られている、「(音や声が) ない、静かな」 = 活動しない、表に現れない)。

物や食物の名称に転用されことは、聴覚語以外の感覚語に共通的に見られる。「視覚語」から転用される名称は、その物の色、形、または新鮮か否かを基準に、「触覚語」から転用される名称はその物の触感、「味覚語」から転用され

る名称はその食物の味、そして「嗅覚語」から転用される名称はそのものの匂いを基に命名されたと思われる。

人や出来事の状態を表すように比喩的に転用されることは、すべての感覚語に共通しているが、その転義の含意にはそれぞれの感覚語による相違が以下の通りにある。「視覚語」からの転用では、人の外見、立場、そして属している組織などを表す。「触覚語」からの転用では、人の性格や言動に対する印象を表す。「味覚語」からの転用では、人や出来事の状態における優しさまたは厳しさの含意を持つ。「嗅覚語」からの転用では、その状態が望まれるかどうかという社会的な判断が付加される。そして、「聴覚語」からの転用では、その状態における積極性の有無が感じられる。

また、精神的な状態を表すように転用されることは、「視覚語」、「触覚語」、「味覚語」、そして「嗅覚語」の比喩的転用に見られるが、「聴覚語」の比喩的転用には見られない。「視覚語」は主に倫理、道徳に関わる精神状態を表す転義を持つようになるのに対し、「触覚語」は精神的な負担の有無、「味覚語」は幸・不幸、そして「嗅覚語」は社会的にマイナスと評価される感情を表す転義を持つようになる。

感覚を表す基本語の中には、たとえば、「赤い」と「黒い」、「甘い」と「苦い」のような、元来対照的な意味を持っていないにもかかわらず、比喩的に転用される時には対照的な意味合いを持つようになるものがある。基本語において対照的な意味の有無に関わらず、そして、元来持っている意味には良し悪しや上・下、プラス・マイナスの差はなくても、転用されると片方がプラス、または積極的な評価の表現として用いられるのに対し、もう一方がマイナス、または消極的な評価として用いられるようになるものも多く見られる。

(3) 感覚語の比喩的転用に見るタイ人の価値観および意識

感覚語の比喩的転用に、タイ人の価値観や人々の意識が反映されていることは、「視覚語」、「触覚語」、「味覚語」そして、「嗅覚語」の転義に見られるが、「聴覚語」のそれには見られない。

「視覚語」と「触覚語」の比喩的転用には人や物事の状態、性質を表すものが多く見られる。「視覚」と「触覚」は目や肌で直接認識や確認をすることが出来るからだと考えられる。転用された「視

覚語」と「触覚語」には、人々の身体的な違い、性格や言動の違い、上下の立場の違い、または能力、精神状態、倫理的、道徳的な違いにより、一方が他方より上または下に位置づけされたり、また一方が善であり、他方が悪である、一方が他方より好印象を与えるなどの価値観が付加されて転用されることはタイ語においての比喩的転用の特徴の一つだと考えられる。一般的に、タイの人々は身体的、社会的、精神的、倫理的な違いを意識することが「視覚語」と「触覚語」の比喩的転用においても確認することが出来た。

「味覚語」の比喩表現には「軽い味」、「柔らかな味」のような優しい味を表す表現も若干見られるが、「濃い味」、「刺激のある味」、「激しい味」のような濃厚、激しい味を表す表現が大半を占めている。そのことは、食物の優しい味も一応評価するが、濃厚、激しい味の方をより重要視している所以であろう。特に、混合されている複雑な味における濃厚さや激烈さが最も重視される一方、「味が無い」または「特定の味が足りない」ものには否定的な評価が下されている。タイ人にとっては、混合されている味を持つ食物は、主に、濃厚または激しい複数の味が共存している空間のように意識されている。料理を作る際に、激しい味と激しい味を戦わせるかのように、様々な味の食材を混ぜ合わせ調理する。そうして出来上がった料理を、さらに食べる人がそれぞれの好みの「濃厚な味」や「刺激のある味」にするために、砂糖(甘味)、唐辛子(辛味)、酢やレモン(酸味)、魚醤(塩辛味)などを加え、「マイテイスト」にする。このように「マイテイスト」を楽しむということは、タイ人は食材そのものの持つ味を味わうよりも、更なる手を加えることで、より豊かな食生活を楽しもうとする食に対するこだわりの強さを表していると考えられる。味に対するだけでなく、「嗅覚語」の比喩的転用にも表されているように、食物の匂いに対する意識も強い。そのことから、「無臭」より「香ばしい」、または「香りのある」方が求められていると解釈できる。日常生活においても、本来香りがないものに人工的な香りを付けるというような生活様式が見られる。このように、「味覚語」と「嗅覚語」の比喩的転用には、タイ人の嗜好が表されていると考えられる。

< 主な引用文献 >

石毛直道、1983、「味覚表現語の分析」、『言語生活』第 382 号、筑摩書店、東京、pp.14-25。

国広哲弥、1989、「五感を表す語彙-共感覚比喩的体系」、『言語』11月号、大修館書店、東京、pp.28-31。

柴田武、1995、『日本語はおもしろい』、岩波新書、東京。

瀬戸賢一、2003、『ことばは味を超える：おいしい表現の探究』、海鳴社、東京。

武井那彦、1989、「色彩と形体と言語」、『言語』18、No.11、大修館書店、東京、pp.38-45。

西尾寅弥、1983、「食の感覚を表す形容詞」、『食のことば』、柴田武、石毛直道(編)、ドメス出版、東京、pp.91-111。

山梨正明、1988、『比喩と理解』、東京大学出版会、東京。

Boonmee Terayuth,2008, 'Waiyakorn Khong Aahaan Thai: Culture is Created but Cuisine is Consumed', "Art&Culture" Vol.29,No.3,Matichon Publishing, Bangkok, pp.163-170.

Evans Nicholas and Wilkins David, 2000, 'In the Mind's Ear: The Semantic Extensions of Perception Verbs in Austrarian Languages', "Language: Journal of the Linguistic Society of America", 76-3,Baltimore: Linguistic Society of America, pp.546-93.

Williams J.M.,1976, 'Synaesthetic adjective: a possible law of semantic universals', "Language", 52-2, pp.461-477.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

宮本マラシー、「タイ語の嗅覚と聴覚を表す表現における比喩的転用」、『EX ORIENTE』第22号、大阪大学言語社会学会、大阪、2015年、pp.37-60、査読無。

宮本マラシー、「タイ語における視覚語の比喩的転用」、『言語文化研究』第40号、大阪大学大学院言語文化研究科、大阪、2014年、pp.153-175、査読有。

宮本マラシー、「味を表すタイ語表現における比喩」、『言語文化研究』第39号、大阪大学大学院言語文化研究科、大阪、2013年、pp.125-148、査読有。

宮本マラシー、「タイ語における味の評価表現」、『大阪大学世界言語研究センター論集』第7号、大阪大学世界言語研究センター、大阪、2012年、pp.55-73、査読有。

〔その他〕

ホームページ等

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/8282/1/riwl_007_055.pdf

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/24698/1/slc_39-125.pdf

http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/27622/1/slc_40-153.pdf

6. 研究組織

(1)研究代表者

宮本 マラシー (MIYAMOTO Marasri)

研究者番号：00200212

(2)研究分担者

なし

(3)連帯研究者

なし

(4)研究協力者

パースサボン・ピューポーチャイ (Passapong PEWPORCHAI)、タイのウボンラーチャターニー大学、人文学部、教員。

マリワン・ブーラナパタナー (Maliwan BURANAPATANA)、タイのコーンケン大学人文社会学部、助教授。

ウィラット・シリワタナナーウィン (Wirat SIRIWATANANAWIN)、タイのシラパコーン大学文学部、教員。